

さえが困ったような顔をしながら、手紙をもらっている。そういえば、四月も、三年のときも、何回かもらっていた。——何の手紙なんだ。

伊藤さえは、ぼくらみたいに暴れて何か壊したりしてないのに、なんか不思議。気になったけど、落とし穴のことで頭がいっぱいで、ちらっと思っただけだ。

木村雄大、佐々木和が呼ばれて、中村智樹が呼ばれて行った。もう一通ある。

「山口茂人くん」

ぼくが呼ばれた。

「よっ、給食大明神」

なんて、リュウが窓際から声をかけるから、おおって答えて、有名人みたいに手をあげて立った。お調子者だの、単純だの、脳天気なんていわれているけど、ぼくは気にしない。

給食大明神なんて名前をつけてくれたのは、担任のマコちゃん。どのクラスも食べ残しが多くて困っているのに四年三組は食べ残し無し。給食室ではめられたりすると、ぼくにいつもお礼をいう。

「給食大明神さまさま」

って手を合わせたりする。でもすぐ、学校前の林のほうにも手を合わせる。林の中に大島稲荷大明神の神社がある。

食べ残しがなくて、給食のおばさんたちに喜ばれている

のは、ぼくがお代わりをして食べてしまうからだ。おばさんたちもぼくのことをよく知っている。このごろぼくと会うと大明神で呼ぶくらいだ。

大明神だから、毎日の給食のことはなんでも知っている。材料の「熱や力になる黄色」、「血や肉になる赤」、「体の調子をととのえる緑」なんて、全部覚えちゃった。毎日の給食のカロリーだって知っている。それに好き嫌いも無いんだ。

大明神だから、一番後ろの席から堂々と、ゆっくりのっそりマコちゃんの前に行く。

「おうちの人に、お願いね」

マコちゃんが優しい顔で、茶色の封筒をくれた。四年三組山口茂人保護者殿って書いてあった。ぽんとランドセルに放り込む。「先生さようなら」をいったら、すぐかけさせる。

家に帰ると父さんはいたけど、一年のさやかはもうどこかに遊びに出かけたみたい。

「はい、お手紙」

テーブルにはおづえをつけてテレビを見ていた父さんの前に、マコちゃんがくれた手紙を置く。うんただけいって、父さんは手紙をそのままにした。

何か飲んでから行こうと思って、冷蔵庫を開けた。ウー